民衆の願いとその求め方について

釋真

(京都西山短期大学) 水

願いであり、 我々は日常生活の中で願いや欲望を絶えずもっている。 災いを避け、幸福を得ることである。 健康でありたい、長生きしたい、 幸せでありたいといっ

そういった場合、我々の運命は神によって決められているのであり、神によって幸福にもなり、不幸にもなる、だか それらの願いをかなえるために我々は日々努力を重ねているが、いくら努力しても願いがかなわない場合もある。

ら神に祈るのである。それを「祈願」「祈禱」という。

祈るということは我々の力では実現できない事を祈るのである。 ではなく、 は国家仏教として国家行事等に取り込まれていくわけであるが、それは仏教本来の教義・思想によって信仰されたの これらは神に対して祈られるものであるが、仏教が伝来してからは仏に対して行われるようにもなる。そして仏教 人間の力を超えた存在、いわゆる仏によって願いがかなえられるのだと信じられたからである。神や仏に

による呪術などの宗教的な儀礼も行われる。 また願いをかなえるために神仏にお願いするといった祈願祈禱の他にも自然の中に拡散している力、神霊などの力

民衆の願いとその求め方について(釋 真弥)

六〇

迷信や呪術・俗信など

ていた形跡がある。 によって、 治病や延命、 攘災招福などを求めるものであると考える。しかし、 呪術などは原始仏教の時代から行われ

このような儀礼等は僧侶など宗教に携わる者にとっては教義に裏付けされない低俗な信仰、

きたいと思う。 ろうか。それらについて仏教や神道、 民衆の願いとはどのようなものであり、それらをどのような方法でもとめ、また各宗教はどのように応えたのであ 陰陽道など民衆の生活に深く根付いていると思われるものを中心に考察してい

国家・民衆の願いについて

思われるが、その中でも今回は「雨乞い」「止雨」「五穀豊穣」に関する願いについて考察していきたいと思う。 小の違いはあるが、これらを拒むものはおそらくいないであろう。この他にも各個人については様々な願いがあると 分に対して、また家族に対してあらゆる災いを避け、幸福を得たいと願っている。これらは、個人によって願望の大 我々の願いは先に述べたように健康や延命を願い、 また財産や名誉等を得たいという欲望を持っている。そして自

A 雨乞い(祈雨)と止雨(晴雨)について

がり、 きな影響を受けている。 災い 逆に雨が多ければ洪水を引き起こし、 には自然による猛威である旱魃や長雨などの天災があり、これらを避ける願いがある。 食料や水などは自然の恩恵によるものである。雨が少なければ水不足や農作物の不作につな また日照不足のため農作物に被害を及ぼす。 また地震や雷などによって 我々の生活は自然に大

も被害や影響を受けている。これらは自然の力であり、我々人間の力ではどうすることもできないことであるが、

れらの自然を意のままにしたいという願いが生まれてくる。

こういった自然の力に対してもたれた顔いが「雨乞い」である。

こういった自然の力に対してもたれた願いが「雨乞い」である。

祈雨に関する記述が多くみられ、『延喜式』三

臨時祭には、

祈雨神西八十五坐

とりわけ古代より雨乞い、

といい、山城、大和、 河内、 和泉、 摂津国の五十一社が一座から四座の祈禱を行った。

『新儀式』四 臨時 祈雨祈霽事には、

布袮二社、別令,,祈禱、或令、奉,,黒毛馬、或非、神祇官差,,進大中臣使、更差,,殿上侍臣於其山上,祈、之(中略) 若四月以後八月以前、久不,降雨、必有,請雨之事、或令,神祇官上,其崇、又遣,使諸社,奉幣禱請、 就,中丹生貴

又仰,,下諸大寺幷五畿七道諸国、遍令,析,,佛法,請,神明,

と記され、丹生と貴布袮の二社に於いて行われ、黒毛馬を奉じさせ、諸大寺、 五畿七道の仏法に祈らせている。

『日本書紀』二十四 皇極には(4)

六月 (中略) 是月、大旱。秋七月 (中略) 戍寅、 群臣相語之曰、随:村々祝部所教、 或殺::牛馬 祭論社神、 或頻

略)八月甲申朔、 移,市、或禱,河伯、 天皇幸:南淵河上、 旣無::所效。蘇我大臣報曰、 跪拜。四方、 仰」天而祈、 可下於::寺々:轉事讀大乗經典公 既雷大雨、 遂雨五日、 悔過如i佛所p說 溥潤:天下。 或本云、 敬而祈〉雨。 五日連

雨、九穀登熟(5)

|代實録』三十三 陽成には

民衆の願いとその求め方について(釋

六二

三日丁卯、 去月より此に至るまで、亢陽して雨ふらず。名山大川の能く雲を興し雨を致すに、並に幣を班ちて雨

を祈りき、 加へ奉りき 賀茂御祖、 別雷、 松尾、 稲荷、 貴布禰、 丹生川上、乙訓、 水主八社是なり。丹生川上には黒馬一疋を

と記され、貴布禰等八社に於いて行われている。ここでも黒毛馬を奉じている。 祈雨についてはこの他 .『続日本紀』

等にも記されている。 次に「止雨」「祈晴」であるが、『延喜式』三 一 臨時祭に

祈雨神西八十五坐(中略)其霖雨不,止祭料亦同、但馬用,白毛

とあり、祈雨同様八十五座行われ、白毛馬が用いられ、また『新儀式』四 八九月間淫雨不、霽、必有,,祈霽之時、令、卜,,其崇幷奉幣諸社,丹生、 貴布袮令,,祈禱,奉,,赤毛馬, 臨時 祈雨祈霽事に(8) 皆同…祈雨之例

又依,,卜莁,令,實,,檢神社邊,,若有,,穢物,令,,解除掃除

と祈雨と同じ項目に記され、内容的にもあまり違いはない。 また霖雨が続く理由として不浄、触穢の疑いがあるという記述がみえ、まず穢の消却が考えられる。穢によって霖 ただ奉ずる馬が止雨の時と祈雨の時では違う程度である。

В 五穀豊穣に関する願いについて

雨が続くとされ、

祈晴を行うのである。

祈雨や晴雨は農作物の成育について願うものであるが、これを総合的に行うのが五穀豊穣の祈願である。 五穀とは米・麦・栗・黍・豆の五種類の穀物であり、 また穀物の総称である。

なかでも我々日本人に関係が深い

は米である。よって五穀豊穣の祈願といっても実際は米の豊作を願うものである。

『新儀式』四 祈念穀事

『日本書紀』十一 仁徳に(10) 若有」可」祈い年穀。上卿奉」仰。 先以,,陰陽寮,勘,,吉日文幷十六社使差文

『日本書紀』十二 反正には 四年、三月己丑朔己酉、 詔曰、(中略)是後、 風雨順」時、 五穀豊穣、 三稔之間、 百姓富寛、 頭徳旣満、 炊烟亦繁。

當,是時、風雨順」時、 五穀成熟、 人民富饒、天下太平。

穀物が順調に育てば食料の心配はなくなり国家安泰であり、 天候は農業を主としている我国おいては非常に重要であり、 国家や民衆にとってはの死活問題であった。そのため 五穀豊穣と国家安泰等が同時に願われる場合がある。

に人々は神や仏といった超自然的な存在に対して祈り、お願いをするのである。

願いの実現方法について

神道や仏教といった宗教においてそれらの願いをかなえる儀礼が行われ、 その儀礼には呪術的要素が強く見られる。

そのような呪術的な儀礼を含めて神道、仏教、陰陽道、民間信仰等を中心に考察していく。

A 神道儀礼について

神道では清浄を尊ぶ宗教であり、 民衆の願いとその求め方について(釋 不浄を忌み嫌う。 真弥 不浄とは、神に対する不敬な態度、 神の怒りに触れるものであ 六三

六四

神の怒りに触れるということは農耕における不作や疾病や災害などの「災い」として現れ、人々に悪影響を及

民衆の願いとその求め方について〈釋

も恐れていたと考えられる。 ぼすものとされ恐れられていたからである。 それは「災い」によって人々の秩序が成立をしなくなると考え、 不浄なものを「穢れ」といい、「災い」が引き起こされる原因として最 宇宙全体の崩壊とさえ

考えられていたのである。

清浄にするものであると考えられている。 また穢は伝染すると考えられ、その媒体となるのは食べ物や水、火であったりする。 しかしそれは流水に限っていえるものであり、 水は一般的には不浄なものを 溜まっているもの池や井戸

ら、これられ穢とよばれるものは決して目に見えない。目で確認できない穢が伝染することに恐怖を感じ、またその 考えられた。 不浄なものを焼いた火、あるいは不浄な場所にあったり不浄な人間の触れた火は逆に不浄なものと変わってしまうと などについては穢を伝染させる媒体となる。火についてもそうである。不浄なものを焼き尽くすという作用があるが、 つまりそのような伝染を防ぐために忌み慎み、謹慎するということにもなったのであろう。しかしなが

禊は身滌ぎ、又は水注ぎの意味であろうとされている。 一般的には身滌ぎの方が多く使われている。

穢を受けた身

こうした「穢」を取り除く行為が「祓」、「禊」であり、「禊」「祓」が一般的に行われていた。

穢を取り除こうとしたと思われる。

死骸を見た後に 体を水によって洗い清めようとするものである。その事は『古事記』に、伊邪那岐神が黄泉国に於いて伊邪那美神の(ヒヒ)

吾は伊那志許米・志許米岐穢き國に到りて在り祁理。 故、 吾は御身の禊爲む。

と述べ、

至座竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原に至り坐して、禊ぎ祓ひたまひき。 これが日本における禊の起源であるといわれているが、これは只文献における初見であるというだけであ

って、当時の一般的な習慣であったと思われる。 と記され、

それは禊という語は見えないが『「魏志」倭人伝』に次のような表現がある。(3)

死という非日常的なものを洗い流そう、身を清めようとしたのではないかと考えられるのである。 というように葬ったのちに家族が水中にて澡浴をしている。これは死というものに携わったもの、 家族が水によって

泣し、他人就いて歌舞飲酒す。已に葬れば、挙家水中に詣りて澡浴し、以て練沐の如くす。

その死には棺あるも槨なく、土を封じて冢をつくる。始め死するや停喪十余日、時に当りて肉を食わず、

喪主哭

あって、先に述べた伊邪那岐神が阿波岐原に於いて禊をされる前に身に着けていた杖、帯、嚢、衣服、褌、 また「祓」とは穢を祓い去る事である。祓の初めの意味は穢に触れたときに身についていたものを祓い落とす事で 冠、手纒

必要な準備行為であって、宗教的意味はなかったようであるが、後の純粋な宗教的意味の祓はこの身体についている 等を悉く捨てたとある。 ものを祓い落とすということから起こったものであると思われる。 古代の人たちは天変地異や災難などの災いは、すべて神の怒りの発現と考えており、神を祭り敬うことによって、 即ち伊邪那岐神は禊をする前にまず祓をしたことになる。ただしこの時の祓は禊を行う為に

難をまぬがれ国家、 家族の安泰と氏族の繁栄をはかる手段の一つとした。農作が中心であった日本では日神、

闇御津羽神を祀る貴布禰・丹生川上の二社において行われ、 また馬が奉納され祈願さ

田神など自然神を祈ることで豊作、五穀豊穣の願いをこめてきたのである。

祈雨や止雨についても水の

民衆の願いとその求め方について(釋

真弥

六六

れている

また稲荷や賀茂別雷においても祈願されている。

賀茂別雷命を祀りその名にあるとおり雷の神である。 り・稲成り」の意味であったのが、収穫した稲を肩に荷うことから「稲荷」の文字を当てられたという。 稲荷は豊宇気毘売神、 別名保食神といい、 五穀をはじめすべての食物、 雷は稲妻、 稲びかりという語があるように雷の後に雨が降るよ 蚕桑のことを司る神で、 イナリは 賀茂別 「稲生

うに農耕には欠くことのできない存在であった。

また祈禱や祭祀を行うにあたり神の前で奏上し、あるいは神の御言として宣下したりする文章が祝詞である。 古代より言語に霊力がやどると信じられ、ある言語を発すると、その言語の内容どおりの状態が実現すると考えら

れた。これを言霊とか言霊信仰とか称して、呪文等もその一つである。

ことが求められる。 神道では不浄によって神の怒りに触れ様々な災いが起こると考えられ、まず神の怒りに触れないように清浄である 不浄とは目に見えない穢や罪であり、それらを取り除くのが禊祓である。そして清浄の身となり

改めて神に願うのである。それが祭祀であり、そこで読まれるのが祝詞である。このように神道では祈禱が願 なえる方法であるが、そこには禊祓や祭祀、 祝詞などがあってはじめて成立するものである。

B 仏教儀礼について

時間が経つにつれ、 仏教は伝来し、すぐに受け入れられたわけではなく、 仏教が信仰されて国家仏教となり、 仏教が伝来した当初は、まったく受け入れなかった。 今までの行事に替わって国家行事にも次第に登場していく。 しかし、

よって神の怒りによる災や病気等の神罰を受けないようにということを目的としていたが、仏教では経典を護持、 れるものは、 ここでの国家仏教としての仏教は『金光明経』 鎮護国家、 攘災招福などの現世利益的なものである。今までの「大祓」等の行事はただ穢を祓うことに 『仁王般若経』 『法華経』を中心とした護国仏教であり、それらに説か(16)

かれているが、現世利益を説くものであり、仏教の教義等ということとはほとんど無関係である。 である。このようなことは、 誦すれば災や病気が無く、 また『金光明経』『仁王経』『法華経』は護国教典であるとともに一種の滅罪経典であるといえる。 国家が安泰になる。そういった現世利益を求める呪術的なものとして信仰されていっ 民衆の中にもみられ、『日本霊異記』においても、 法華経の利益や般若経の利益等がと その理由は、 た

の悪業を滅除しなければならない。そして善を積むことによって国家が安泰になるとされた。その国家の業は権力者 国思想は国家自身の業という事が前提となり、政治が乱れたり、天災が起こったり、 病気などが流行することは国

護

法会が行われたのである。 るのである。 である天皇の業とも関わっている。そして天皇が国家に代わり善行を為して国家の悪業を善業に転換することができ 事実、 それらの経典により罪過を懺悔する悔過、 薬師悔過等や法華懺法等の懺法、 最勝会や仁王会等の

り入れたと思われる。 古代の罪穢を祓うということが仏教の「悔過」(8) また祈願のためにの仏教儀礼が行われ、 国家行事として行われた儀礼に御斎会、 維摩会などがある。

「懺(19 法)

等の儀礼と主旨が類似しているということで仏教儀礼を取

極殿に斎を設け、 本尊に盧舎那仏を安置し、 観音、 虚空蔵を脇侍に、 四天王を配して、 金光明最勝王経を講説 Ļ

民衆の願いとその求め方について(釋

真弥

御斎会は称徳天皇神護景雲元年正月には宮中において始めて行われた。これは正月八日から十四日まで十七日間大

玉

六八

家の安寧を祈禱せられる儀式で『三宝絵詞』下によれば(20)

ノワザハヒヲハラフ。 最勝王経ニノ給ハク、 夜ハ吉祥悔過ヲオコナハシメタマフ。吉祥天女ハ毗沙門ノ妻ナリ。 国王此經ヲ講ズレバ、 (中略) コレニヨリテ、オホヤケ大極殿ヲカザリ、 王ツネニ樂ビヲウケ、民又クルシビナシ。 七日夜ヲカギリテ、 風雨 時ニシタガ ヒ ル ハ最勝王 国家

五穀倉ニミチ、

諸ノネガヒ心ニカナへ

ヲ

ムトイフ誓アレバナリ。

講ジ、

とあり、 国家安寧・五穀豊穣を祈るために行われた。

誦し、 維摩会の起源は斎明天皇二年に中臣鎌足が山城国宇治の陶原の邸で病になった時、 平癒を祈って験を得たと伝説されたのに始まり、毎年十月十日に始まって十六日に終わる七日間興福寺講堂に 百済の法明尼が維摩経問 ?疾品を

て行われた。 仏教は祈禱儀礼等によってその効力を認められ国家仏教となったが、それはあくまでも呪術的要素、 効力が重要で

国家泰平、玉対安穏、五穀豊穣が中心であった。 あったのである。そして民衆もそれらの効力を求めたと考えられる。そして国家行事として行われる場合、 鎮護国家

C 陰陽道儀礼について

陰陽道は仏教とほとんど時を同じくして日本に伝来したとされる、古代中国に発生した陰陽五行思想に基づくもの

である。

陰陽道の成立はおおよそ奈良時代末期から、 平安時代に求められる。 当初の陰陽道の役割は、 吉凶の判断・天文の

どの陰陽道的禁忌が貴族が守るべきものとされ、これに伴い陰陽道も暦や天文といったものよりも呪術的なものを強 奉幣使を立てたり、 いうことが特に重要とされた。 寺院に経典の転読を命じたりさせるのが一般的であり、陰の存在であった。 そして国家に天変地異が起これば、 陰陽寮がこれを占い、 その結果に基づい しかし物忌や方違な

漏刻の管理などであり、

中でも卜占によってさまざまな事象の吉凶を判断し、

国家に及ぼす害を未然に知ると

8

い祭祀や祓の中にも陰陽道の影響がでてくるのである。

神道や仏教との習合の色彩をみせ、平安時代には陰陽師がとり行う祭祀や祓が出現する。

また陰陽師が関与しな

七瀬祓は、 陰陽道が関係する祭祀や祓等の儀礼には七瀬祓、 是は毎月の事なり、 陰陽道と神道の祓が習合したものであると考えられる。『公事根源』(⑵) 七瀬とは、 川合、 一條、 土御門、 河臨祓、 近衛、 巳日祓がある。 中御門、大炊御門、二条のすえ、 の正月の七瀬御祓の条に 七瀬とは申 なり、

陰陽師人形を奉る、

主上御いきをかけ、

れば、

て人形を授けられその人形に息を吹きかけて体を撫でる。そしてそれを持って川原に向かう。 と記されており、 こなはる、その所々は、 主上御撫物をめすまねせらる、 毎月に川合、 耳敏川、 一條等の七ヵ所の霊所に於いて祓いを行ったというものである。 河合、 東瀧、 松崎、 石影、 西瀧、 大井川などなり 隔月に霊所七瀬の そして陰陽師 御祓をお によっ

その他にはさしたる事

その外さしたる事なし、後冷泉院の御時は、

御身をなでゝ返し給へ、殿上の侍臣この所々の川原にむかふ、

か

へりま

このように七瀬祓では陰陽師によってつくられた人形で身体を撫でて、自分の身の穢を人形に移し川に流すことに

と記されている

て身を清めるというものである。 民衆の願いとその求め方について(釋 また河臨祓と呼ばれるものがあるが、 真弥 これは七瀬祓と同じようなものであっ

らしく、『侍中群要』七の御祭等事に

河臨御祓 霊所七瀬

と記されており、 また『掌中和歌年中行事』一六にも(23)

七瀬の御祓を河臨の御祓とも申す

と記されている。

巳日祓は三月の巳日に行なわれるもので、三月上巳祓ともいわれ。これは『新撰字鏡』(24)

の禊の条に

戸系反法上巳祭也、又云三月三日得巳為上巳上巳乃波良戸

と記され、『公事根源』三月の曲水宴の条にも(25)

上巳のはらへとて、人みな東流の水上にてはらへするよし、漢書などにしるせり

とあり『漢書』九十七外戚孝武衛皇后の項に(26)

中略帝〇武帝祓覇上、孟康曰月上巳祓除也於覇水上自祓除、今三月上巳祓禊也、 師古曰、祓音廃禊音系

が後には人々が流水池辺のみぎわに座り、上流から流した杯をとる。それを「曲水の宴」という。桃をへき邪の呪物 と記されている。これは中国の古来の風習に、三月の初めの巳の日に水辺に出て災厄を祓う上巳の行事があり、それ

三月上巳祓は特に人形を重要視し、まずは、自分自身の穢を祓うことが第一の目的であり、 陰陽師を通じて中

国 . の とすることから桃の酒を飲む習慣を生んだ。これが日本に伝わり宮中でも行われた。

上巳の風俗と神道の禊行事が結びつき、また陰陽道と習合したと考えられる。

陰陽道は呪術的要素が強いが、 それが仏教と融合し、 また古くから国家の中心にいたことからも神道と結びつく場

とから信仰する人々が増加したのではないであろうか。 れている。 合が多かった。そして仏教と陰陽道、神道と陰陽道という融合がなされ、それぞれが互いに自分たちの儀礼に取り入 互いが融合することによって効果が上がり、 また信仰が得にくいものが、互いの要素を取り入れているこ

D 民間信仰儀礼について

域社会共同体の一般民衆の間に成立し、育成された日常的な庶民信仰をいう」と規定し、(タス) 民間信仰の定義にはさまざまなものがあるが桜井徳太郎氏は民俗学の立場から「成立宗教の領域に属さないで、 人々の日常生活・社会生活 地

の一つとなり、また御霊の信仰も形成された。これらの信仰に基づいた様々な習俗、 まず雨乞いの習俗であるが大森恵子氏によると一五の形態に大別することが出来る。それは(タヒン) 儀礼が存在している。

拝し、それらに霊を認める精霊崇拝、更に神格化した山の神・水神・石神・海神・風神・雷神などの信仰が主要な柱

山・海・川・水・岩石・樹木・草花・動物・日月星辰・風・雨・雷などを聖なるものとして崇

そのなかで大きな比重を占めているのが原始宗教に繋がる自然

に対する信仰である。

に基盤をおき、

宗教のなかで基層に位置づけられる。

一、水神に参詣し、宮篭りをして雨を乞う。

二、修験の山に雨乞代参をする。

三、山登りや岳登りをして雨を乞う。

四、経文や百万遍念仏、和讃を唱えて雨を乞う。

五、池。川、沼、滝の水を信仰対象にして雨を乞う。

三 著 月 著 浴の方で作作文章の日本下で

民衆の願いとその求め方について(釋

真弥

民衆の願いとその求め方について(釋

石に雨を乞う。 井戸、 海に様々な品を投げ込み、 雨を乞う。

七 六

> 池、 Щ 淹、

瓢簞、水瓶、経筒、 壷などを土中に埋めて雨を乞う。

九 牛、馬、人間など生贄を水神に捧げて雨を乞う。

् 験競べや競技をして雨を乞う。 藁蛇やトンド竜など、竜の造り物を使用して雨を乞う。 和歌や俳句を詠じて雨を乞う。

三、民俗芸能を雨乞祈願の目的で、前出の雨乞習俗の形態一で記した神社や、その他の八幡神社、天満宮などに

四、 雨乞踊りと俗称される風流太鼓踊りや風流踊りを、塚や墓などに奉納して雨を乞う。

五

御霊神や死者の霊を供養して雨を乞う。

奉納する。

属する雨乞踊りを水神や御霊神へ奉納するのが一般的であったと報告されている。 全体が長期間にわたり共同で降雨を祈願し、それでも雨に恵まれないときは最後の手段として、一三~一五の形態に

以上の一五に分類することができ、古来、旱魃のおりには一~一二に属する雨乞の諸形態を種々に組み合わせ、村

果があると思われたものから行われ、その効果によっては複合的なものを行っていったと思われる。 それらは仏教、 念仏や神道、 修験道や道教的なもの、 呪術を含んだ様々な形態で行われており、 おそらく手頃で効

教儀礼は人々の願いによって発展していったとも考えられるのである。 効力があるということを示すために、 われるというように複数の儀礼によって祈願、 効力があるのかに関心があり、確実に願いをかなえてくれるものを求めた。その結果神道儀礼と仏教儀礼が同時に行 義・思想と関係のない、二次的要素として発展してきたのである。 れらをかなえる為に、 以上人々がもつ代表的な願いについてみてきたが、それはほんの一部分にすぎず、我々の願いには限りがない。 各宗教は様々な儀礼を行っている。しかしそれらの儀礼は呪術的なものが多く、 人々が好む他宗教の要素を取り入れ融合させていったのではないだろうか。 祈禱が行われた。そして各宗教は自分たちの儀礼が最も優れている、 人々は何が願いをかなえてくれるのか、 各宗教 何が一番 の教

そ

2

「延喜式」『新訂増補国史大系

交替式・弘仁式・延喜式前編』

吉川弘文館

- 1 『古事類苑』神祇部三十五 古事類苑刊行会 昭9
- 3 「新儀式」 『群書類従第六輯』 続群書類従完成会

下

「三代実録」『訓読日本三代実録』 「日本書紀 『日本古典文学大系』六八 岩波書店 臨川書店

昭 42

5 4

- 6 「続日本紀」 『訓読続日本紀』 臨川書店 昭 61
- $\widehat{7}$ 註2参照
- 註3参照
- 8 註3参照

民衆の願いとその求め方について

真弥)

「日本書紀上」『日本古典文学大系』六七

民衆の願いとその求め方について(釋

12

『「魏志」倭人伝』

「古事記」『日本古典文学大系』 一 岩波書店

昭 39

11 10 註10 参昭 岩波書店 昭 42

 $\widehat{14}$ $\widehat{13}$ 『大正新修大蔵経』(以下、『大正』と略す)一六「金光明経」四巻 岩波文庫 石原道博編訳 岩波書店 平成4 『大正』一六「金光明最勝王経」 一〇巻

 $\widehat{16}$ 15 17 『日本古典文学大系』七〇「日本靈異記」岩波書店 『大正』八「佛説仁王般若波羅蜜経」二巻 『大正』八「仁王護国般若波羅蜜多経」二巻 『大正』九「妙法蓮華経」七巻 昭 42

19 18 信仰する対象によって、薬師悔過、阿弥陀悔過、吉祥悔過等がある。 懺法とは懺悔をする方法の意味で、広い意味にも用いるが、普通は諸経の説によって罪過を懺悔する儀式的な法則で 「悔過」は罪過を懺悔する意味。佛等の前で自ら身口意業の罪過を懺悔し、 以て福利を得ることを求める行事をいう。

 $\widehat{20}$ 「三宝絵」『新日本古典文学大系31』岩波書店 平 9

ある懺儀をいう。

21 『公事根源』三巻 一条兼良撰 京•平楽寺 慶安二(一六四九)

24 23 $\widehat{22}$ 『持中群要』一三八頁 『掌中和歌年中行事』未見。 「新撰字鏡」二巻 昌住撰『群書類従』二一巻内 目崎徳衛校訂 吉川弘文館 昭 60

25 27 26 『漢書』九七巻 註20参照 『念仏芸能と御霊信仰』名著出版 『日本民俗宗教論』桜井徳太郎 班固撰 一〇〇巻 中華書局 春秋社 平 4 昭 57 昭 57